



感覚と感受されるもの(秋の部)(冬の部)

蓮沼, 啓介

(Citation)

神戸法學雑誌, 73(1):207-248

(Issue Date)

2023-06-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100482609>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482609>



神戸法学雑誌第七十三巻第一号二〇二三年六月

感覚と感受されるもの

(秋の部) (冬の部)

蓮 沼 啓 介

感覚と感受されるもの (秋の部)

第七講 実在 Reality とは何なのか。

似て非なるものの違いをわきまえる。これがリアリズムの極みであり真骨頂である。

ところがエアと来たら、自分の言葉遣いと日常の言葉遣いの違いを見落とし、見逃し、自分勝手な単語の意味使用に平気で走っている。物事の見かけ appearances とつつ reality の違いを見損なっているばかりか、見かけ appearances と一見それに似た「sense-data (感覚データ)」という「entities (存在者)」とを完璧に取り違えている。エアはその議論の中で「real」とか「really」とか「real shape」と言った語句を良く調べもせずに多用し時に濫用している。

そこで「real」という単語の通常の用法に注意を向け、現実の本性 nature of reality について少々議論を深めることにしよう。

「real」という単語の持つ意味合いは捉えづらく捕まえにくい。似て非なるものの違いを調べ確かめる。その違いが real ということであるから、real という語のすべてに共通の意味合いといったものはどこにもない。ヴァイトゲンシュタインが青帳面 blue book の中で family likeness 家族らしさに注意を払っている。

家族はそれぞれ似ているが、似方は様々である。鼻がそっくりであったり、眉毛がそっくりであったり、歩き方がそっくりであったりする。しかも似たところが重なっているのが普通である（17頁）。家族はそれぞれに似ているもののその似方は色々であり様々である。game という単語もこの点では家族に似ていて、その類似点は様々である。更に language game 言語ゲームと他のゲームを比べて見てもその似ている点は千差万別である。言語ゲームの内部においても同じことである。「real」という単語の用い方にも色々あってそれぞれに似ているもののその似方には細部に亘る細々とした違いが潜んでいる。

こうした特徴は similar とか like とかいう単語にもそのまま当てはまる。similar とか like といった言葉に示される、似ているあり方や似方には様々の形がある。似ている似方はそれぞれに似て非なるものである。似ている似方の細々とした違いをわきまえるには日常の言葉の使い方を丹念に精しく細やかに調べ直し、調べ尽くすことがかなめとなる。

ブタという単語を用いてブタという生き物を指し示す。ブタではない生き物や物事をブタという単語を用いて指し示すことは通常は行われぬ。こうした言葉のすっきりした使い方が行われていると設定して見よう。ある日ブタによく似た新しい生き物が発見されたとしよう。この生き物を何と呼べばいいのか。しばらくは沈黙が保たれることになるだろう。「It is a pig (これはブタだ)」とも「It is not a pig (これはブタではない)」とも言い切れないからである。こうした場合には「It is like a pig (これはブタに似ている)」とすることができそうである。その上で「But it isn't a real pig (でも本物のブタではない)」と言い添えることとなる。「Not a real pig but like a pig (本物のブタではないが、ブタに良く似ている)」という言い回しを用いて「pig (ブタ)」という言葉の意味合いに変更を加えることなしに、この新しい生き物を言葉で言い表すことができることになる。「like」と「real」という単語を併せ用いることによりこうした便利な言葉遣いが実現される。似て非なるものとの違いを示す「real」という用語のおかげでこうした微妙な言葉の使い分けが実行できることになるわけで

⁽¹⁾
ある。

「real」という単語の使い方に見られる特徴を二点に絞ってまず確認しておく。

1 「real」はごく普通の **normal** なありふれた単語である。技術的な特別の用語ではない。日常の言葉としてしっかりと確立していて実際にしばしば用いられる。こうした意味ではこの単語には固定した意味が備わっているし、思いつきでその場限りの冗句を撒き散らしたりは仲々できない言葉である。

哲学者の多くはどの単語にも好き勝手に意味を与えることが出来ると考えている模様であるが、些細な意味 **sense** ではそういえないもないにせよ、「**material thing**」の様な哲学者しか使わない類の用語にそれは限られる。多くの単語はこれとは対照的に定まったやり方で「**in fact**」事実用いられていて、この事実は見過ごすわけには行かない。とはいえ言葉がどう使用されているかという発見だけで事終われりとなるわけではない。発見したままの形に固定すべきという理由は見当たらない。少しばかり調べて地図のあちこちに修正を加え、境目 **boundaries** や区分け **distinction** を引き直すのも喜ばしいことである。

但し次の点は忘れない方がいい。(a) 日常の言葉に込められた区分けは案外古いものが多く、しかもそれほど目立つものではないが恣意的ではないものばかりである。(b) 我々が取り扱うものをしかと見定めることが必要である。(c) 用語の変更は思いも掛けない反響を隣接する領域にもたらすことになりやすい。変更が必要なことは滅多にない。だいたい事実を見損なって変更が必要であるという誤った判断を下すに至るようである。

また「**not real cream**」といった日常茶飯で些末な言い回しを哲学者たちは軽視する傾向が強い。こうした細かな使い分けに気を配れば、「**real cream**」ではないからといって何か実在しない空想物を指すといった誤解に陥らないで済みそうである。

-
- (1) 外来語のリアルは見かけがそっくりであるという意味合いに用いられることが普通である。本物そっくりの見かけをした造り物ということである。実物みたいだということである。

2 反面ではこうも言える。「real」という単語は普通に有り触れた normal の単語ではない。極めて例外的な単語である。どこが例外的か。「yellow (黄色)」とか「horse (馬)」とか「walk (歩く)」といった単語と比べてみれば違いがよく分かる。こちらの単語には共通の意味合いがある。ところが「real」にはそうした共通の意味合いは認められない。だからといって様々な多義的な意味を有するというのでもない。多義的 ambiguous ではないということである。この手の単語は本当に厄介者である。困惑 perplexity をもたらすからである。

次の表現を考察すると問題点が明白になる。「cricket ball (クリケットの球)」
「cricket butt (クリケットのバット)」
「cricket pavilion (クリケットの展示場)」
「cricket weather (クリケット日より)」といった語句に見える「cricket」という単語に対応する共通の事柄とは何であろうか。この問題点は「good (善きもの)」とか「real (本当の)」といった単語に共通の意味合いを探し求める試みに常に付きまとう困難である。

「real colour」や「real shape」については答えようのない問いが発生しやすい。例えば「What is the real shape of a cat? (猫の本当の形はどんなものか)」といった問いに答えるために定まった判定のやり方などはない。従って元々答えようのない問い掛けということになる。

この点で「real duck」や「real diamond」は遥かに扱いやすい。「not real」なものを見つけやすいからである。「decoy duck (模型のアヒル)」とか「toy duck (おもちゃのアヒル)」とか「paste diamond (人造のダイヤモンド)」とか「glass diamond (ガラスのダイヤモンド)」とか本物ではないものが色々見つかるからである。

「real」という用語はちょっと見ただけ調べただけよりずっと多彩であることが分かって来る。特に様々な文脈で色々に用いられることが判明する。そこで多種多様な使い方を少しばかり片付けて分かりやすく説明を試みよう。

1 まず「real」という単語は「substantive-hungry (中身が足りない・内実が乏しい)」といえる。「pink diamond」なら「this is pink」と言えるが「real diamond」では「this is real」とは言えない。理由ははっきりしている。「real」

であって同時に「not real」であることが極く普通のことであるからである。例えば「real decoy duck (本物の模型のアヒル)」は「not real duck (本物のアヒルではないもの)」になる。

「the same」や「one」も「substantive-hungry」な単語である。内実が乏しいというか中身が足りない言葉である。兵士の一团は一つの部隊one companyであるし、三つの分隊 three platoons でもある。なかでも「good」は不足が様々な形で求められる曰く付きの単語でありくせ者である。

2 次に「real」は「a trouser-word」⁽²⁾ 訳して筒裾言葉である。

通常の言葉の意味は肯定形が基本であって、肯定の形を確かめてその意味を知識として確定した後に、その否定形の意味が浮かんでくるものである。ところが「real」という単語ではそうではなくて否定的な用法が先行している。いつてみれば肯定形と否定形がワンセットになっていて、右裾と左すそが一体となっているズボンのような形をしているということである。うち否定の側の足がまず活躍するし役に立つ。こういった按配である。要するに「not real」な事態を指し示すために用いられる単語である。その上で「not real」ではないという二重否定の事態をも裏側から合わせ示す言葉である。つまりはこうである。「something is real (何かが本物である)」という主張assertionは、まず「not real (本物ではない)」とはどういうことかを示す一定の特別な筋道が示された後にそれに照らしてその狭い範囲でのみ「definite sense (定まった意味)」が決まって来る。確定した意味が付着されることになる。こういうことである。

例えて言えば、「real」という刃と「not real」という刃が重なって始めてハサ

-
- (2) trouserは訳しにくい単語である。筒袖に倣ってここでは試みに筒すそと訳して見た。trousers ズボンのうち片方だけを指し示す語であり、ズボンの片足のことである。ズボンやハサミは片方の足や刃だけでは何の役にも立たない用具であるが、その半身だけを指し示す言い方である。(あるいは片箸言葉とか一本箸言葉とか片端し語とか呼んでもいい)。特に火ばしや菜ばしは金具や紐で括つてあるものが多いが、一本だけでは使い物にならないからである。

ミになる。「not real」という右足と「real」という左足が揃ってはじめて役に立つ服装になるし、言葉になるという具合である。

「a real duck」と「a duck」とで何がどう違うのか。「a real duck（本物のアヒル）」とは（「本物ではないアヒル」ではない）アヒルのことである。あるいは（「本物ではない鴨」ではない）鴨のことである。本物ではない鴨とは何のことか。例えば贋物 dummy の鴨とか。おもちゃ toy の鴨とか。絵に描いた picture の鴨とか。模造 decoy の鴨とかのことである。あるいはおもちゃのアヒルかも、ね。本物のアヒルや鴨みたいなものを色々集めてその中から本物ではないものを外に取り exclude 出して、残ったものだけが本物のアヒルや鴨として内に置かれる即ち include されるということになる。本物ではないアヒルや鴨として話し手が何を念頭に置いているのか分からないと「it is a real duck」という主張をどう受け取ったらいいのか判らないということになる訳である。

「real」という単語の役目は何かの特性を積極的に示し表わすものではなくて「not real」なものを外に取り出す exclude ということにある。しかもそうした「not real」であるあり方には色々なものがあるし、事物の種類によっては多様なものであるから、同一の役割を果たしているにも拘わらずその内実は多様性そのものといった事態が発生しても少しもおかしいことはない。詰まる所「real」は一義的とも多義的とも言えない言葉である。

3 第三に「real」は「a dimension-word（次元を設定する言葉）」である。一連の同種の単語の中で最も一般的 general かつ包括的 comprehensive な用語 term である。肯定の側には「proper（本来の）」「genuine（本物の）」「live（生きいきした）」「true（真実の）」「authentic（本格的な）」「natural（天然の）」などがあり、否定の側には「artificial（人工の）」「false（贋の）」「fake（偽りの）」「bogus（まやかしの）」「makeshift（間に合わせの）」「dummy（代用の）」「synthetic（合成の）」「toy（おもちゃの）」などがあり、また名詞として「dream（夢）」「illusion（錯覚）」「mirage（知らぬ井）」などがある。天然と人工という対と本物と贋物という対を真と偽という軸に沿って並べ直したものである。

肯定の単語と否定の単語が一对になっているものが多い。例えば「proper theater」があればいいのと言えは今あるのは「makeshift theater」であることを仄めかす言い方になる。絵画なら「genuine（本物）」か「fake（まがい物）」かが重要な問題とされる。絹なら「natural（天然）」か「artificial（人造）」かが区別されるし、爆薬なら「live（実弾）」か「dummy（代用品）」かが分別する。品物ごとに何が似せであるかを具体的に示す事例と用語がほぼ決まっている。「Is this a real silk?（これは本物の絹ですか）」と訊ねる場合には「as opposed to artificial（人絹ではなく）」と付け加えたいくなる。逆に「toy silk（おもちゃの絹）」といったものは見たこともないしそんな言葉を耳にしたこともないので何も浮かんでは来ない。

よく分からないので疑問に思うことがこの分野には沢山あるが、その辺りには立ち入らないことにする。

4 「real」は「adjuster-words（調整言葉）」という家族にも所属している。調整言葉は調整言葉ではないそれ以外の言葉が言語に対する世間の要望に応じるように調節する作用や働きを担う。極く大雑把に言って語彙は限られていて、無数の多様な状況に到底応じ切れるものではない。適当な言葉が見つからない時に間に合わせの言い方をして何とか目先の必要を満たす。これが調整言葉である。例えばブタのような生き物が新しく発見されたときに「It is like a pig（これはブタに似ている）」と言う。こうした言葉の使い方である。「It isn't a real pig（これは本物のブタではない）」と言い足せば、手持ちの単語を使うだけで新たな事態に対応してそれを言葉に言い表わすことができる。「like」と「real」は便利な言葉である。

こうした言い方は「like」を使わないとできないか。次のような可能性が別にある。「piggish（ブタめいた）」とか「quasi-pigs（にせブタ）」とか「pig-type（ブタ風）」とか言うことも考えられなくはない。ただこうした新しい語彙を作成するやり方では「like」の代わりは務まらない。何故かと言えば、新しい語彙は「pig」という語彙と同一のレベルでしか作動しないからである。これで

は直ぐに行き詰まりが発生してしまう。ワインの一種であるポートによく似た飲み物ができたので「port-type (ポート風)」と名付けたところ、今度は「port-type」によく似た飲み物が出来たので、「port-type=type (ポート風風)」と呼ぶといった複雑で面倒な分かりにくいことに成りかねない。「It is like port-type wine (これはポート風に似たワインだ)」と言えば、「a new word (新しい単語)」を使わないで済ますことが出来る。これが調整言葉の底力である。

「the real」と「the not real」を識別する一般的な規準 criteria はない。事物ごとに別々である。また規準は最終的 final なものではない。こう仮想して見よう。ある日我々が今猫と呼んでいる種類の生き物が話し始めたでしょう。多分初めのうちは「This cat can talk (この猫は話ができる)」というと思う。ところが別の猫たちも話し始めたが、なかには話せない猫もいたでしょう。こうなると「talking cat (お喋り猫)」と「non-talking cat (だんまり猫)」とを区別する必要が生じる。更にやがて殆どの猫が話すようになると話す猫だけが「real cat (本当の猫)」だと言いたくなってしまう。こうなると「not a real cat」の中に話せないことを除けば普通の猫である生き物まで入ることにきつとなってしまふことだろう。

第八講 外見 Appearance と本体 Reality

エアは「real」という語を一風変わった意味合いに用いている。

円形の硬貨を正面から見ると円形に見えるが、斜めから見ると楕円形に見える。硬貨が円形に見えるという感覚データと硬貨が楕円形に見えるという感覚データと比べてみても信頼度に差は見当たらないし、感覚データとしては同じようなものである。にも拘わらず、硬貨が円形に見えるという感覚データの方が本当の形というか本来の姿を示していると普通誰もが思ってしまう。それはどうしてなのか。

この疑問に対してエアは独自の解答を有している。それは予測力の違いである。これがエアの解答である。硬貨の本来の形は円形であると見定めると、色々な場合にどうなるかを予測することができる。こうした予測力に違いがあるの

で、硬貨が円形に見えるという感覚データには特別の関心が集まり、そうした予測力の高い感覚データは「real」本来のものであるとされる。エアは予測力の高い感覚データに「real」という名称を付している訳である。

通常の見解はこうである。人々はごく自然にそうした感覚データを選ぶからである。自然な選択の結果が出ているだけである。これが通常の見解である。だがエアはこうした通常の見解には不満である。エアは二つの不満を投げつける。まずすべての感覚データについて自然にそれを選ぶとまでは言い切れないという。統一的な見解にはなっていないと言うのである。次に自然に選ぶといっても選ぶ際の基準や判断材料がまったく示されていない。これでは見解としては不十分である。見解に不足があると言うわけである。エアとしては人々は予測力の差異に応じてそれに従って嗜好を行っていると言っている訳である。

だが私の見るところではエアの見解は間違っている。論拠が二つある。まずエアの見解には大量の見落としがある。次にエアの見解に真っ向から対立してそれを覆す事例がある。こうした不具合がある以上はエアの見解は成り立たない。

まず事例の見落としから点検を開始しよう。エアは人を欺く *delusive* な感覚データには二種類の区別があるとする。一は存在そのものについて人を欺き偽るものであるし、他は性質について人を欺き偽るものである。だがエアのこの区別は不完全なものである。エアは次のような事例を完全に見落とししている。例えばおとり用の模型の鴨を生きた本物の鴨と見間違えてしまうような事例である。こうした体験がエアの挙げるどちらの事例に当てはまるのかははっきりしない。本物の生きた鴨は存在しないが、模型の鴨は実在するからである。

これと似た事例を二つ挙げてエアの区別のどちらにもうまく当てはまらない場合が大量にあることを示して置く。エアの区別には不具合があるということである。どちらも色 *colour* に関する事例である。先に触れたが、髪を染めている人を見てあれは *real* 本当の色ではないと極く普通に言う。どうしてか。手を掛けて人工の細工を加えて髪の色を変色させた結果であるからである。生まれ

つきの天然の髪の色が自然の色であるし本当の **real** な色である、と多くの人々は判定を下すのである。

別の例を挙げよう。普通なら白い花が咲く植物の標本を緑色の液体に浸けて育てたところ、花びらが淡い緑色に染まったとしよう。この色は本当の色ではないと私なら平気で言う。どうしてか。天然の花の色は白いからである。言い換えれば人工の細工を加えずに天然のままに育てれば白い花が咲くからである。植物の種に宿された性質の素（つまり今言う遺伝子）に沿いその定めに従う。それが天然ということである。

こうした事例はエアの区別には巧く当てはまらない。エアの区別には不具合がある証拠である。

またエアの学説に合わない、それを覆す反例がある。白い糸と黒い糸を合わせた交叉模様の布を直ぐそばで見れば交叉模様に見えるが、四、五メートル離れたところから見れば灰色に見えるという予想が付くし、実際に灰色に見える。これとは反対に四、五メートル離れたところから交叉模様の布を見れば灰色に見えるものの、近づいて見れば交叉模様に見えるかどうかは見当が付かない。にも拘わらず、この布の色は灰色だと誰もが皆いう。この例はエアの説明と正面から衝突する。エアの学説に不具合があることは明白である。

確かにエアの言い分にも一理ある。人々が自然に選ぶ感覚データには高い予測力が備わっているからである。これは事実である。とはいえこれは副産物に過ぎない。人々が示す選好の結果に伴うだけの副産物にとどまるものであって、それが人々が選好を行う際に活用される判断規準や判定の材料そのものではないからである。

それでは人々が自然に示す選好を左右するのはどのような要因であろうか。「taste」味見を別の例に採って分析を加えて、どのような要因が作動しているのか、探りを入れて見よう。ワインを飲む習慣がない人にワインを勧めたところ、「It's sour (酔っぱい味がする)」という応答が返って来たとしよう。そんな場面ではきっと私は「It isn't really sour (本当に酔っぱいですか)」と異議を挟

むことになるという気がする。その心はこうである。もしその人がもう少し好意的にワインを試飲したとすれば、ワインは酔っぱい物と同じ様なものというだけではない何かしらがあることを実感したであろうし、またその人物の当初の反応は理解できるものではあるが、やや inappropriate 適切さに欠けていたことを思い知ったであろうという notion 概念を抱き伝えるという心根である。

「It's sour」は近似値である。それに続く「It isn't really sour」は更に詳しい近似値である。味わい taste をぴったりにあらわす言葉は必ずしも備わっているとは限らないし、慣れない味 taste を味わい尽くすことも直ぐスグには出来ないことであろうから、徐々にゆっくりと味 taste を確かめそれにふさわしい言葉を編み出して行く。人々はこうした的確さや正確さを追求して、それに適わしい感覚や言葉を本当の感覚や本当の言葉として見立て見定める傾向を有していると言うことの様である。感受力の高さを追求する。感受性を磨き上げ研ぎ澄ます力がどれほど備わっているのか。こうした力を高く強く備えた感覚データが本物として選好される。どうやらこうした傾きが感じられそうである。更に詳しくは個別の事例を丹念に調べ上げ入念に点検する操作の集積の上に始めて人々の選好の中にありそれを左右している要因が何であるかも浮かび上がってくるということの模様である。

エアの失敗の原因について一言い添えて置こう。それは無いものねだりである。すべてを纏めて一度に説明できるような便利な説明装置は存在しない。エアは言ってみれば狐火や鬼火に不安を感じてそれを一思いに捕まえてしまおうとしているかの如くである。植物が出す微かなガスが燃えているだけのことである。丁寧に調べれば恐るるに足りない些細な現象である。実在の世界はエアが思い描いているようにスムーズに二分されているわけではないということである。

第九講 言葉遣いが違うだけか。

外界の事物について平凡な人物が語ることと哲学者が語るとはまるで異なっている。こうした事態に直面してエアは言葉遣いには二種類の違いがある

ためにこうした事態が発生すると説明を加えている。sense 意味には二通りの意味があるとエアは言う。

ここでエアの説く二つの意味の違いとは何であるか、確認して置く。まず meaning という単語の meaning 意味には次の二種類がある。sense 意味内容と reference 指示対象がそれである。次に sense という単語の meaning についても sense 意味内容と reference 指示対象とが区別される。エアのいう sense には二種類の意味があるという学説はあくまでも sense という単語の sense 意味内容に関する学説であって、sense という単語の reference 指示対象にまで言い及ぶものではない。

言い換えれば、エアが二種類の言葉遣いがあるという場合、エアのいう二種類の sense とは sense という単語の sense 意味内容に限られた言い方であり、それゆえ、その reference 指示対象である感覚の作用にまでは言い及んでいない。この点には注意が必要である。エアは人々が言葉をどう用いるかという言語学の対象である言葉遣いの範囲の内側で観察される出来事に目を向け、言語学的な学説を展開しているわけである。

平凡な人物も哲学者も実は同一の現象に直面し、それを経験している。だが平凡な人物が用いる言葉遣いと哲学者が用いる言葉遣いはまるで別物であるため、全く異なった事が出来しているかの印象が発生してしまう。違いは単純に言葉遣いの違いに過ぎない。それに止まるものである。使う言葉の意味内容が大幅にずれている。それだけのことである。

こうした言語学的な学説は優雅であるし、上品でもある。エアの才気が溢れんばかりである。

だが私の見るところではエアの学説は間違いである。なぜなら言葉の意味に二種類あるというエアが表立って公式に表明する学説には論拠が欠如しているからである。しかもエアの論述のあちこちに見え隠れするその暗黙の信念に照らして見ると、エアは公式見解を表向きに唱えているだけであって、その暗黙の信念は手付かずの形で別に用意されているので、公式見解が崩壊してもエアの基本的な立場には少しも動揺が生じないという都合のいい関係にある。エア

は二枚舌ではないが、二枚腰ではある。エアの学説は二段構えに出来ているので、それなりに強固である。簡単には突き崩せない。

従って今回の講義ではエアの唱える言語学的な学説に的を絞って、その論拠が全く足りないことをお示しする。その上で次回の講義においてエアが密かに抱く本来の学説にも十分な論拠が欠けていることを示す目論見である。

エアの論証はこうである。「perceive」という知覚を表わす動詞やその一例である「see」という視覚の作用をあらわす動詞には二種類の意味がある。夜空の星を見上げる体験を例に取ればこうなる。星は光る点に過ぎず、六ペンスの銅貨よりも小さく見える。これは「see」という動詞の一つの意味である。地球よりも巨大な星が見える。これは「see」という動詞の別の意味である。地球よりも巨大な星が六ペンスの銅貨よりも小さいということは有り得ないことであるが、それは「see」の持つ二つの意味を強引にひと纏めにしてしまう結果として発生する不可解な事態である。感覚の印象をそのまま語る言葉遣いと感覚の対象を正確に語る言葉遣いが併存しているからこういうことにもなる。

これがエアの学説である。

こうした事態を持ち出してもエアのいう言葉遣いが二種類あるという学説を支える根拠になりはしない。「see」という単語はそれが用いられる情景 *circumstance* によって異なった用い方をされることがある。ただそれだけのことである。「see」という単語の意味内容が二極化したり多数化したりしているわけではない。言葉の意味は言葉が用いられる情景 *circumstance* に応じて用い方が変わるだけのことである。「I see a silvery speck (銀色の点が見える)」とも言えるし「I see a huge star (巨大な星が見える)」とも言える。「see」という単語のごく有り触れた用い方に従ってどちらの言い方もできる。私が見たものはそれでは何か。それは「silvery speck (銀色の点)」とも叙述できるし、「huge star (巨大な星)」と確認することもできる。その銀色の点は言葉を変えて言えば巨大な星にほかならないからこうした言い方ができるわけである。

望遠鏡を覗いている人に何が見える？と訊ねるとしよう。

(1)「A bright speck (光る点が見える)」

(2) 「A star (星が見える)」

(3) 「Sirius (シリウスが見える)」

(4) 「The image in the fourteenth mirror of the telescope (望遠鏡の14番目の反射鏡に写った像が見える)」

以上のような答えが返って来たとして、どれが正解であろうか。どの答えも正しいという場合もあり得る。正解は一つと決まっているわけではないからである。同一の現象を見ても色々な言い表し方ができるのであって情景 *circumstance* によってどれが適切であるかどうかが決まってくる。

また解答が間違っている場合だってありうる。

(2b) 「planet 惑星のことは普通 star とは言わないよ」

(3b) 「違うよ、あれはベテルギウスだよ」

(4b) 「おかしいな、この望遠鏡には反射鏡は12枚しか使われていないのに」
同一の現象を様々に言い表せるだけのことである。

「I saw an insignificant-looking man in black trousers (私は黒ズボンをはいた風采のあがらない男を見た)」 「I saw Hitler (私はヒトラーを見た)」 という場合に「saw」という単語に二つの意味があるわけではない。あの黒ズボンをはいた風采のあがらない男がヒトラーである。ただそれだけの話である。

エアは情景 *circumstance* に応じて同一の単語が別々の形に用いられるという言葉の意味作用に気づいていないため、そこに二種類の意味の差異を発見!? してしまったわけである。実際にはエアが開始したことは *see* という単語に備わる普通の意味とは異なるそれとは別の独自の意味を自ら発明!? してそれを普及させるという試みである。エアはこの試みにより不可謬の世界を構築するというイカロスの飛躍に似た墜落の危険に満ち満ちた冒険に足を踏み出したのである。

因みに「sense」という単語の第二の意味である指示対象 *reference* に刮目してその二重性や多様性を探求する試みも行われている。心理学のなかでもゲシュタルト派の心理学がそうであるし、ヴァイトゲンシュタインも『哲学探求』においてこうした試みに挑戦している。「duck-rabbit」という絵図がある。うさぎと

もアヒルとも見える絵図を見て、アヒルと見る人もいればうさぎと見る人もいる。視覚という作用の実相を探り、そこに異なった複数の作用が介在していることを示唆する探求である。英語では「see … as」という公式を用いて表現されることが多い。「I see it as a duck」「as a rabbit」といった具合である。「私にはアヒル／うさぎに見える」とか「私はアヒル／うさぎと見る」といった意味の語形である。日本語では「…と見える」「…と（して）見る」「…と見て取る」「…と見極める／見定める」「…と見立てる」といった語形に言い表されることになる。

とはいえエアにとっては「sense」という単語の第二の意味である指示対象 reference として特定される視覚という作用は一様であって、そこに複数の異なった作用が介在しているといった見解は無縁である。

[補論の一] sensibilia

sensibilia という単語はももとはラテン語である。ラテン語の形容詞である sensibilis（感覚器官で感知できるとか目に見えるという意味の単語）の変化形である。単数中性の形が sensible であるし、その複数形が sensibilia である。

OEDを引くところある。

sensibile … Usu.in pl. sensibilia. [L., neut. of sensibilis SENSIBLE.] A term popularized by Bertrand Russell to denote the kind of things which, if sensed, is a sense-datum.

1856 …

1918 B.Russell. *Mysticism & Logic* viii .148, I shall give the name sensibilia to those objects which have same metaphysical and physical status as sense-data, without necessarily being data to any mind. Thus the relation of a sensible to a sense-datum is like that of a man to a husband : a man becomes a husband by entering into the relation of marriage, and … a sensible becomes a sense-datum by entering into the relation of acquaintance. … 1940 A. J. Ayer *Found. Emp. Knowl.*

ii .71 We shall have to take as a criterion for the existence of a sensible the truth of a single hypothetical proposition. 1962 J. L. Ausitn (title) Sense and sensibilia.

OEDによればsensibiliaという単語を普及させた人物はラッセルである。

Sensibilia という語はラッセルが1914年に書いた「感覚与件の物理学に関する関係」という論文の中で用いている。同1917『神秘主義と論理』（江森巳之助訳、みすず書房、1959年。新装版1995年、170頁）参照。ラッセルは「sensible」というラテン語を「sense-datum」にほぼ当たる用語として採用し、その複数形である「sensibilia」をほぼ「sense-data」の意味に用いている。

ラッセルは男と夫の違いを利用して「sensible」と感覚データの違いを説明する。男は結婚の中に置けば夫となる。夫は結婚の外に出せば男に戻る。「sensible」は意識acquaintanceの中に置けば「sense-datum」になるが、「sense-datum」は意識の外に出れば「sensible」に戻る。ラッセルのいう「sense-datum」とは次のようなものである。「Let us give the name of ‘sense-data’ to the things that are immediately known to sensation : such things as colours, sounds, smells, hardness, roughness, and so on.」色 colours や音 sounds や臭い smell や固さ hardness や粗さ roughness などなどがラッセルのいう感覚データである。

感覚刺激sensationによって直接に確かめられる物事である。ラッセルは次のような奇妙な設定を設けて意識から感覚データを切り離すことを試みる。

「もし—ありえないことだが—その中に精神を持たない完全な人間の肉体があったとすれば、精神を持つ場合には感覚与件となるであろうところのセンシビリアが、すべてその肉体に対する関係において存在するであろう。精神がセンシビリアに附加するものは実は単に意識にすぎない。その他のものはすべて⁽³⁾物理学的あるいは生理学的である」。

(3) ラッセル前掲書172頁。英原文にはこうある。「If—per impossibile—there were a complete human body with no mind inside it, all those sensibilia would exist, in relation to that body, which would be sense-data if there were a mind in the body. What the mind adds to sensibilia, in fact, is merely awareness : everything else is

実際には sense-data を意識から切り離すことはできない。そもそもなぜ「a sensible」が必要とされるのか。ラッセルの考えはこうである。すなわち科学知識の究極の根拠となり証拠となる感覚データは主観に左右されすぎて余り当てにならないものにすぎないからである。主観的な要素を完全に剥ぎ取ることができればいいのに。これがラッセルの思いである。感覚データをそれを支える生理プロセスに還元できるかもしれないという儚い希望をラッセルは抱いているわけである。

ラッセルの淡い希望に対してはエアが手厳しい批判を加えている。「a sensible」についてエアはこう語っている。「We shall have to take as a criterion for the existence of a sensible the truth of a single proposition (われわれは単一の仮言命題が真であることを可感的なものの存在の規準としなくてはならない)」。エアの反論はこうである。「もし誰かが聞けばこう聞こえる」といった仮言命題が「a sensible」が存在する証しとされるのであろうが、こうした証しではラッセルが期待するような公共性や確実性は持ちえない。それは精々誰かがそうした体験を持つということを示すだけにとどまるものである。そうした体験が一般的に発生するといった事態を示すことにはならないから、知識を支える確実な根拠には一切なりえない。感覚データが物質的な事物とは全く別のものであるかぎり、それが意識と結合しようといまいと、数多くの人々に共通に開かれているという意味での公共的な説得力を備えることにはならないからである。⁽⁴⁾

別の道もある。例えば G.E. ムーアである。ムーアは見かけの理論 The Theory of Appearing⁽⁵⁾ を唱えている。見かけとは次のようなものである。人々が見たり触れたりするものはそこにある対象の表面の部分である。これが見かけであ

physical and physiological」111頁。

- (4) エアが1940年に「ラッセルの言うセンシビリア」とラッセルの論文に言い及び批評を加え異論を展開している。(A.J. エア『経験的知識の基礎』勁草書房、1991年。69頁)。
- (5) エア前掲書、47～49頁。学説の分類と名称はブライスに基づく。

る。見えるという経験は「対象の表面の一部」と「ある特性」と「ある心」とが織りなす「三項関係」であり、見かけとはその名前である。この関係は独自であり分析不可能である。a という対象には b という特性が備わっている。これがある人 S の心に現れている。これが三項関係である。こうした見方に立てば、感覚データ **sense-data** は物質的な事物と心の現れの結合物ということになるので、ラッセルの杞憂という心配は当たらないことになる。G.E. ムーアや H.A. プリチャードが唱えた見かけの理論を引き継ぎ発展させたのが J.L. オースティンである。

オースティンの異論はこうである。「**sensibilia**」は「**sense-data**」の一部である。「**sense-data**」の中には「**sensibilia**」ではないものもある。それは例えば妄想 **delusion** である。妄想 **delusion** には対応する実在の事物はない。それは多くの場合異常な神経や精神状態の産物である。妄想 **delusion** とは異なり、錯覚 **illusion** は「**sensibilia**」である。錯覚 **illusion** は発生するのが当然の自然現象あるいは心理現象であって、自然法則や心理法則に従って生じる奇異ではあるが当たり前の現象である。夢や想像は対応する実在の事物がないという点では妄想 **delusion** に近い。夢や想像は「**sense-data**」には入るが「**sensibilia**」には入らない。「**sensibilia**」の実在を否定するエアに対して錯覚 **illusion** などはその極端な具体例であることを対置して、オースティンはエアの論拠が不十分であることを入念に解き明かしているわけである。

ラッセルに対しては「**sensibilia**」は「**sense-data**」の一種であるから、意識を伴う現象であることを強調する。ラッセルとオースティンの見解を対照すると次のごとくである。

sensibilia + 意識 = **sense-data** (ラッセル)

sensibilia + 夢や妄想 = **sense-data** (オースティン)

sense-data はここに現れるが、**sensibilia** はオースティンに拠ればところと繋がる物の一部でもある。従って物理法則にしたがって出現する。**sensibilia** は純

然たる物と純然たるこのころの間に挟まるものである。⁽⁶⁾

sensibiliaはこころとものを繋ぐ結び目であり橋であるし、こころとももの重なり合うところの出来事である。視覚とはこころとももの交差する場所であるし、それは生物によく見られる生命現象の原風景である。見るという行動は生物に良く見られる動作であるし行動である。それはいのちの発露である。鳥やけものたちは猫やカラスがそうである様に周りを良く見回す目を持った生き物である。視覚を始めとする感覚の発動とはこころともものに跨る現象である。それは境界現象である。⁽⁷⁾

-
- (6) sensibiliaが外界の事物に対応していると判断される根拠を並立しておく。
- (1) 物理法則に合致した形で出現し発生する。
 - (2) 視覚を頼りに行動しても自然に振る舞えるし、意のままに動き回れる。
 - (3) まぶたの内外が繋がっているときに出現する。
 - (4) 脳内の神経回路を巡る生体電流には発生源が外部であることが波長に刻印されていると推察される。
- (7) 視覚という体験のモデルをざっと描いてみよう。外界の事物に反射した光が眼に至り網膜を刺激すると網膜に刺激の配列が発生する。この配列が生体電流により視覚中枢に伝達されるとそこに微細な刺激の配列が生成する。この微細な刺激の配列が感覚データの実態である。人の脳（ないし心）にはあたかもこの微細な刺激の配列を原寸大に拡大する性能が備わっていて外界の光景がそっくりそのままの形で再現されるかの如くである。これが見かけの理論に言う見かけの実態である。人の心には外界の光景をそのまま縮小して再現し更に元の形そのままになるまで拡大するという往復運動の如き性能が備わっているということである*。ひとまずはこう推算される。おそらくは感覚刺激の発生源を復元する能力が備わっているということの模様である。その詳細の解析には脳物理学 brain physics や生物物理学 bio-physics や電子生物学 electron biology の登場が待たれるところである。

* このメカニズムはひとまず次の様に分析され説明される。

人の眼に映る外界の光景は平面的であって奥行きを欠くと内省により観測される。片眼を瞑って例えば右眼だけで外界を見ると、視野に映じる事物の色や形はそれぞれの前後関係や遠近関係に沿って出現するが、奥行きや深さを示すデータは一切出現しない。それは例えて言えばあたかも三次元の風景を平面に置き換え描いた風景画の如きである。

また右眼だけで見た外界と逆に右眼を瞑って左眼だけで見た外界には微妙な

[補論の二] アキレスと亀

ギルバート・ライルがアキレスは亀には追いつけないというツェノンの逆説⁽⁸⁾を取り上げ、解説を試みている。⁽⁹⁾

二つの常識があるとライルは言う。全体は部分をすべて集めたものである。つまり全体はその部分の合計である。これは強固な常識であり鉄則と言ってもいい。またこれとは別の常識がある。全体は部分よりも大きい。逆に言えば部分は全体よりも小さい。

アキレスが亀に追いつくまでに走った距離を全体とすれば、アキレスに対して亀が有していたリードはどれもその部分であるから、リードの合計は全体となる。つまりアキレスは亀に追い付くことになる。これが第一の常識が教えてくれる結末である。

だがアキレスに対する亀のリードの合計を全体とすれば、それまでにアキレスが走った距離はその部分となる。全体は部分より大きいので、アキレスは亀に追い付くことができない。アキレスに対する亀のリードはどんどん減って小さくなっていくが、そのリードは有限の距離であって決してゼロにはならない

違いがあるが、両眼を開いて見る外界にはそうしたずれは見られない。両眼で見る外界には奥行きや深さが備わっていて、見える対象までの距離を目算により計測することができる。ある色や形を備えた対象までの距離に適った位置に色や形を移すことにより、左眼の外界に出現する色や形と右眼の外界に出現する色や形とがぴつたりと重なり合い一つに合致することになる。別の言葉で言い換えれば、外界の事物が実在するところに一つの色と形が出現することになるわけである。

片眼に映じる光景はエアのいう感覚データである。それは人の心の中に出現する。これに対して両眼に映じる光景は G.E. ムーアや H.A. プリチャードのいう見かけ **Appearing** である。それは外界に実在する事物の表面であると同時にそれと不可分である心の中のイメージである。心の中のイメージがそのまま外界に実在する事物の表面の位置に移し出される。視覚や他の感覚というのはこうした不思議な体験である。

(8) アリストテレス『自然学』第六卷第九章

(9) ライル 1954『ジレンマ』勁草書房、1997

からである。全体は部分より大きいという常識が成り立つ限り、アキレスは亀に追い付くことは出来ないという結論は避けがたい。

ライルは論点を明白にするために次のような設定を行なう。アキレスは時速十一マイルで走り亀は時速一マイルで這うことにする。そして亀は最初に一マイルだけリードしているものとする。もし亀が全く動かず、しかもアキレスが時速十マイルで走ったとすれば、レースは一時間の十分の一である六分で終了する。アキレスは時速十一マイルで走るので六分の間に1.1マイルだけ走る。亀は六分の間に1/10マイル這うので、六分の後にアキレスは亀に追い付くことになる。六分の間にアキレスが走った距離を全体とすれば亀の二つのリードすなわち亀の最初のリードである一マイルと亀が六分の間に進む距離である0.1マイルのリードはどちらもその部分であるから、その合計は全体と一致する。第一の常識の通りである。

しかしながら別の考えも成立する。アキレスが亀の最初のリードだけ走る間に亀は更にもっと少ないものの僅かなリードを実現する。この繰り返しには際限がない。亀のリードがどんなに僅かなものでもリードが有限である限り、アキレスは亀に追い付けない。第二の常識がそう教えてくれる。こうした繰り返しは何回繰り返されてもそれが有限である限りアキレスは亀に追い付けないことになる。

ここでラッセルの議論が思い起こされることになる⁽¹⁰⁾。

残された問題は何か。アキレスは亀に追いつけないという説明には高い説得力が備わっている。どのようにしてこうした強い説得力が発生するのか。そのロジックとプシコロジックが明らかにされていない。バートランド・ラッセルが説得力が発生するロジックをこう解説している。

多くの人々は全体は部分より大きいという考えを常識として抱いている。部分が全体に等しいなどという主張は馬鹿げていると思っている。更に言えば狂気の沙汰であるとすら感じている。だがこれは有限の分野で成り立つ常識であ

(10) ラッセル1917『神秘主義と論理』みすず書房新装版1995。102頁

る。無限の分野でもこうした常識が成り立つのか。そうではないのか。この点をしっかりと考え抜いた人はほとんどいない。

無限の項を含む集合すなわち無限集合から有限数の項を取り去っても、残るのは無限数の項である。無限集合から有限数の項を取り去ったその部分集合もまた無限集合であるとする、全体集合と部分集合が同じ大きさという奇怪な結論が出てしまう。この結論が奇怪なのは人々は有限の分野に暮らしてそれに慣れ切っているからである。

だがラッセルの解説には不満が残る。確かにアキレスは亀に追いつくことができる。だがいつどこで追いつくのか、十分な説明が行われてはいない。それは亀のリードが無限小になるときである。リードの加算を有限回繰り返してもアキレスの走った距離より亀のリードした距離の合算の方が長いという事態に変化は生じない。亀のリードの距離がどんどん少なくなり短くなって行くだけのことである。言葉を変えて言えば、亀のリードの合計を全体とすればアキレスの走った距離はいつまで経ってもその部分に止どまる、それでしかないのである。全体は部分より大きい。とすればアキレスが亀に追いつくことはありえないしできないことになる。

だがリードの加算の回数が無限回になると事態は一変する。全体と部分が同じ大きさになることが始まるからである。

全体は部分の合計である。これは不変の真理である。だがこの真理が成立するのは有限数の世界に於いてである。無限数の世界に入るとこうした有限数の世界で成り立つ常識は動揺することになる。無限数の要素からなる無限集合から有限数の要素を取り去っても、あとに無限数の要素からなる無限集合が残る。無限数の領域に入ると全体とか部分とかいうコンセプトの輪郭はぼやけてしまい、有限数の世界では不変の真理であった常識も成立するかどうか怪しくなる。

同じ事がもう一つの常識にも発生する。全体はどの部分よりも大きい。部分の合計に残余を加えると全体になる。有限数の世界ではこれは鉄則であり不変の真理である。だが無限数の領域に入るとこうした有限数の世界で成り立つ常

識は動揺し崩れ去ることになる。全体と部分が等しいつまり同じ大きさであることが発生するからである。

いま亀の進んだ距離を全体とすればそれまでにアキレスの走った距離はその部分となる。アキレスに対して亀は僅かではあるがリードを保っているからである。亀がリードを保つあいだはアキレスは亀に追い付くことはない。なぜなら全体は常に部分より大きいからである。だがこの常識は有限数の世界で成り立つ真理である。それゆえ亀のリードの回数が無限数に入るとこうした常識は動揺し崩れ去る。全体とその部分が等しくなればアキレスは亀に追い付くことになる。

亀のリードが無限小になるとき、亀のリードは無限数の領域に入る。無限小とは $1/\infty$ のことである。 $1/x$ という形の分数のうち最小の分数が $1/\infty$ つまり無限小である。無限小という分数は0よりは大きいが他のどの分数よりも小さい。従って無限小の距離を更に分割することはできない。それ以上分割できない単位はアトムである。アトムを分割することはできない。アキレスに対する亀のリードが無限小の距離になった次の瞬間にアキレスは亀に追いつき亀を追い越すことになる。アキレスが亀の二倍の速度でゆっくりと歩いている場合ならばこうなる。



ツェノンの逆説が発生する原因を有限数の常識を無限数にまで拡張して適用する人々の心理に求めたのはB.ラッセルである。

だがラッセルの解説には不満が残る。確かにアキレスは亀に追いつくことができる。だがいつどこで追い付くのか、十分な説明が行われてはいない。それは亀のリードが無限小になるときである。リードの加算を有限回繰り返してもアキレスの走った距離より亀のリードした距離の合算の方が長いという事態に

変化は生じない。亀のリードの距離がどんどん少なくなり短くなって行くだけのことである。言葉を変えて言えば、亀のリードの合計を全体とすればアキレスの走った距離はいつまで経ってもその部分に止どまる。それでしかないのである。全体は部分より大きい。とすればアキレスが亀に追い付くことはありえないしできないことになる。

だがリードの加算の回数が無限回になると事態は一変する。全体と部分が同じ大きさになることが始まるからである。ラッセルが鋭く指摘する通りである。だがラッセルは無限小という分数の果たす役割を侮って、アキレスがどの地点、どの時点で亀に追い付くかを説明せずに済ませてしまった。無限小は不要であるという数学者の常識をラッセルは不用意にも自然の世界で実行されると想定される競技の世界にそのまま持ち込んでしまったのである。測量の対象は実在する事物やその間の距離である。実在する競技場に示された直線と純粋な幾何学の世界で描かれる直線とはその存在論的な身分を異にする。自然数の無限大は通常の数え方の極限や限界として示されるが、実数の無限大は純粋な幾何学の世界に虚在する空想された直線上の点の数であって、それは全き空想の産み出した架空の産物である。

次の分数列が収斂する先はどこか。ここに問題の中心がある。

$$1/2, 1/4, 1/8, 1/16, 1/32 \cdots 1/2^* \cdots \Rightarrow 1/\infty \text{ or } 0 \quad (* = n)$$

分数列が0に収斂するといういわゆる連続体仮説は純粋幾何学が成立する根本前提ではあるが、実在の世界にあっては $1/2^* (* = \infty)$ という無限小の分数のところで停止すると思考せざるを得ない。簡略に表せば $1/\infty$ という分数である。アキレスに対する亀のリードが無限小という最小限になった次の瞬間にはもはや亀のリードは保たれず、言葉を代えて言えば、亀はアキレスに追い抜かれてしまうのである。こうした結論は避けがたい。

にも拘わらず、アキレスは亀に追い付けないかの錯覚が発生するのは次の様な心理が働くからである。有限の自然数 n と2の n 乗とを比較すると $2^* (* = n)$ の方が遥かに大きな数である。こうした有限数の世界で生じる常識をそのまま無限数の領域にまで拡大して適用すると ∞ よりも $2^* (* = \infty)$ の方がずっと大

きいという錯覚が発生する。(実際にはどちらもそれより大きい自然数のない無限大であり同じ大きさの数である)。その逆数を作ると $1/\infty$ よりも $1/2^*$ ($* = \infty$)の方がずーと小さな分数であるという錯覚に囚われることになる。(実際にはどちらもそれよりも小さな分数はない無限小であり、同じ大きさの分数である)。 $1/\infty$ よりも小さな分数があるのならもっと小さい分数が次々と並んで出現してもおかしくはない。アキレスに対する亀のリードには際限が無くなってしまう。

ライルの掲げるケーキの cut off 切り取りの事例⁽¹¹⁾では、まずケーキの半分を切り取る。次に半分になったケーキの残りの半分つまり4分の1を切り取る。こうした切り取りを何度繰り返しても、残りはどんどん小さくなるが、わずかな残りは常にあることになる。(実際には残りが小さすぎて半分だけ切り取ることが事実上できなくなったときにこの切り取りの作業は停止となり終了する)。

亀のリードについても半分になり4分の1になりどんどん少なくなるが、リードが無くなることはない。だがそれ以上に分割出来ない最小単位に到達したときツェノンの逆説と呼ばれるこのゲームは終了する。

自然数の無限大と実数の無限大。この区別に失敗すると、いつどこでアキレスが亀に追い付くのか分からなくなる。連続体仮説に従う限り距離にはそれ以上分割できない最小単位は有り得ないからである。

(2023年1月7日 了)

感覚と感受されるもの (冬の部)

第十講 無謬の真理への憧れ

エアの間違いのおおもとは「entail」という単語の日常用法をきちんと調べなかったところにあると言える。数学やロジックの分野では「entail」は帰結する

(11) ライル『ジレンマ』64頁以下参照。

という明確な意味を持つ形で使用されている。ところがエアと来たらこうした用法をそれにふさわしくない分野に越境して持ち込んで変な意味合いに使っている。これは奇妙なことである。エアによれば「物質的な対象」に関する叙述は「感覚データ」に関する叙述を「entail」帰結することになる。その意味合いは良く分からないものではあるが、おそらくはそれに連なって成立する位の意味合いであろう。とすればこういうことになる。今私があなたと庭にあるテーブルに向かって椅子に座ってお茶を飲んでいるとしよう。そこにのっそりと豚が入ってきたので「this is a pig」と言ったとする。豚やテーブルや椅子や庭がエアのいう「物質的な対象」であることは明らかである。この一文から「感覚データ」に関するどんな叙述が「entail」されるというのだろうか。「It looks・・・」とか「It sounds・・・」とか「It smells・・・」とかいう叙述が「entail」帰結されるなどと誰も言わないし、そんな言い方は端的にあり得ない。眼の前に豚がいる場合にはそれが豚であることは一目で分かることであって、別に何か確たる証拠がなければそれが豚であるかないか判定できないといった事態はまずあり得ない。目の前にいる豚は私が頭や心の中に想像した豚のイメージではなくて、実在する豚そのものである。手を伸ばせば触ることもできる実物の生き物である。

にも拘わらず、こうした回りくどい説明をエアが試みるのはどうしてなのか。

それはエアがデカルトの神話をそのまま信奉しているからである。物質的な対象に関する言語とそれとは別に感覚データに関する言語が別々にあって二種類の言語が使い分けられていると説明すれば、物心二分論に沿った説明になるからである。「see」とか「perceive」といった知覚を表す動詞には二種類の別々の意味があるし、使い方があると説明すれば、デカルトの神話をそのまま引き継ぐことができるからである。

この点はエアとカルナップの意見の相違を調べ上げれば明白になる。エアはカルナップを形式主義として批判している。「検証と経験」の中でエアはカルナップとの違いを強調する。最大の違いは真理のコンセプトである。カルナップは真理の整合説を唱えている。知識は命題の体系であるという観点を共有し

ながら、その真理観は極端に対立的である。カルナップによれば命題の真理は他の命題と整合的であれば真になるというものである。相互に矛盾対立しない命題の体系が真理であるという形でカルナップは真理を定義する。規約次第で何が真であり偽であるかは全く左右される。すべては反転してしまう。カルナップのいう真理は形式的である。数学やロジックの分野ではいざ知らず、これはそのまま実在の領域に当てはめれば常識に沿わない野蛮 wild な真理の定義であると言わざるを得ない。カルナップは師匠であるフレーゲに忠実に過ぎるのである。数は実在すると思い込んだその過ちを拡大再生産しているのである。

真理の定義についてはエアの方がまだましである。感覚データと合致する命題が真である。従って「物質的な対象」に関する叙述は直接には検証できない。これがエアの学説である。

ただしカルナップがプロトコル叙述と呼ぶ体験記述については、エアのようにそれをすべて感覚データに関する叙述と捉えてそう分類する二分法よりも、命題の生成規則と変形規則という論理的な構文論の範囲に自説を限定するカルナップの方がはるかにましである。プロトコルの生成は規約に示されているが、実際の使用法は規約には規定されていないからである。その使用は物理学者を中心とする科学者の実際の研究活動にすべて任されているわけである。

構文論の規約が別にあるとするカルナップの立場は既に物心二分論を遠く離れてそれに逸脱しているものであるが、エアの説く言語と意味の二刀流は正に物心二分論そのものである。エアはデカルトの直系の愛弟子なのである。

こうした言語（と意味）の二分法に基づいてその二種類の言語（と意味）の間に成り立つ置き換え規則に従ってある人々は日常の言語を用いある人々は科学的な言語を用いている。これがエアの学説である。

こうした置き換え規則による置き換えの操作をエアは「entail」という単語を用いて表現しているわけである。

エアの見解はこうまとめられる。「物質的事物」に関する命題は「経験的にテスト可能」であるが、決定的には conclusively 検証できない。一方「感覚デー

タ」に関する命題はカルナップのいう「観察文 observation-sentences」であってこちらは無謬 incorrigible である。

こうして見ればエアが表向きに掲げる公式見解は二言語の使い分けという説明ではあるものの、エアが内心から信奉しているのは物心二分論であることは明白である。

エアの間違いを次の二点に絞って論じ反駁を加える。無謬性と証拠の二点である。まず無謬性であるが、何か間違いのない文があるという考えには無理がある。どんな文章でも言い間違えたり書き間違えたりすることがあり得るし、どんなに用心深く言葉を選んでも不都合が発覚することがないとは言えない。無謬である種類の文や命題があるという考えを捨てれば、情景に照らして無謬と言ってもいい発言が結構あることも判明する。無謬である文や命題があるという考えが間違いのもとである。文の意味は情景や状況に応じて決まるものである。

次に証拠であるが、証拠を提供する種類の文や命題があるという考えが間違いのもとである。エアは証拠について勘違いしているとしか考えられない。「物質的な対象」に関する叙述を行う話し手はいつでも証拠を提出できるし必ずそうしているしまたしなければならないとエアは考えている様子であるが、そう言ったことはない。証拠について恐ろしく歪んだ考えを抱いているとしか言えない。眼の前に豚がいるときに「this is a pig」と発言したとしよう。こうした場合には別に証拠などは一切不要である。そこに豚がいることは分かり切ったことであって更に証拠が必要な場合とは事情がまるで違っているわけである。

議論をまとめておく。(1) 次の様な種類の文(や命題)は存在しない。すなわち (a) そうした文は無謬である。(b) そうした文は他の文に対して証拠を提供する。(c) 他の文を検証する際にチェックする必要がある。

(2) 「物質的な事物」に関する文章について次のような事はない。(a) 証拠が別に必要である。(b) 検証が必要である。(c) 決定的には検証できない。

どうしてここまで無謬性にこだわるのか。これは哲学者の宿命であるし、職業病であるからである。無謬性の追求は哲学の歴史において敬して遠ざけられ

る厄介者 **bugbear** であった。古代哲学では野放しであって特にプラトンはひどかったが、近代になってデカルトに於いて鮮やかに甦ったし、後継者たちに手渡され引き継がれていった。動機は様々であるが委細には入らない。わかりやすい例としては絶対に確実 **absolutely certain** なものの追求とかプラトンが追求した恒真のものの **always true** とかである。

エアもきっとこの病に侵されているのであろう。間違いを嫌がったり恐れたりする必要はないのに。少しずつ詳しくなっていくのが知識の発展というものである。誰だって一度や二度は間違いを犯すものである。

エアの学説のうち面白いことが一つ残っていた。エアは「物質的な対象」に関する叙述は「**vague**」漠としているのに対して「感覚データ」に関する叙述は「**precise**」精密であると論じているが、「**vague**」は漠とした語であってエアの言いたいことが何であるのか十分は伝わらないし、「**precise**」には尺度が必要なのにエアはそうした尺度をなんら示にしていけないので、その説明には精密さが足りないままである。

第十一講 ワーノックよお前もか。

ワーノックによるパークリの思想の論述はおおむね申し分ないが、二三気になる所が残っている。いま二点に絞って疑問点を提出し批評を試みたい。二点とは「**immediately perceive**」にいう「**immediately**」の意味と、感覚や知覚の作用を「**verdict**」判事や陪審員団の評決に喩える説明の二点である。

まず「**immediately perceive** (ただただ忽ち直ちに知覚する)」という言い方であるが、対象とその知覚との間に何も隔てがない、何も挟まっていないという意味合いが含まれる言い方である。こうした知覚の対象と知覚の作用が近接しているというのは、どちらも心の内に位置するという意味合いが含まれた言い方である。これでは対象はすべて感覚データに限られると言うに等しい。ワーノックはいつの間にか感覚データ説に接近しそこに取り込まれてしまっているかの如き状態にある。パークリはくせ者である。パークリの用語には油断は禁物である。

次に感覚をあらわす言葉を判定宣告 *verdict* に喩えるやり方であるが、判事や陪審員団の下す評決などの判定宣告は、十分な時間をかける余裕がない状況でしかも証拠も足りない状態で下される判定であって、感覚や知覚に与えられたデータの確実性や細部に亘る豊富さとはまるで情景が違っているのであるから、証拠の使い方が全く異なっている。ところがワーノックと来たらこうした大幅な違いを見逃して、感覚を語る言葉にも判定宣告に欠かせない証拠と同じような証拠が必要であるという間違った推論に嵌まり込んでしまっている。判定宣告の最大の特質は目撃者ではない人々が下すところにある。まさにいま問題とされている事項について判事にせよ陪審員団にせよ実際には目撃してはいない人々が証拠に照らして下す判定である。ここに判定宣告の精密かつ正確な *precisely* 特色がある。証拠に基づいて評決を下すことは、精密かつ正確に言えば、初めて手を触れた人という権威を持たない人が何らかの事物について発言することにほかならない。従って「物質的事物」に関する叙述は一般的に評定の如きものであると言うことは、我々はそうした叙述を行うのに最適な位置には決して立てない、ということに他ならない。最適な位置に立つことはあり得ないと言うに等しいことである。言ってみれば、「物質的世界」で発生している物事を目撃証人という者はあり得ない、と言うようなものである。我々は精々証拠を得ることが出来るだけであって、目撃は決してできないと言うに等しい。

しかしながらこんな風にこの事例を位置づけるのは、「物質的事物」に関して物事の真理は決して知りえないと示唆するものであるし、物事の真偽を確かめることもできないと示唆するものでもある。更にそうした示唆を行うことが物の道理に適ったことの様に人々に思わせしめることでさえある。何となれば結局の所我々には証拠が無いのだし、実際に発生していることに直接近づく途は断たれているのであるし、しかも評定というものが間違ふことがあるのは悪名高きことであるからである。

とはいえ自らの鼻の先で何が生じているのか語る際に私はいま評定を下している *giving a verdict* などと仄めかすのは馬鹿馬鹿しい限りである。こうした比較対照の類いほどに実害が多いものも考えにくい。

ともあれワーノックの議論に伴う最大の難所は二つの言語という教説を（おそらくはバークリに誘われて）呑み込むという地点に到着し、一時的にせよ、二種類の存在者 **entities** という教説を飲み込んでしまった様に見えるところである。さすれば、証拠を示す言語（「観念」言語）と物質の対象を示す言語とがどのように関連しているのか、といったそこから派生するワーノックが解答を探し求めている問題は、そもそも答えの無い問いであるし、現実性が完璧に欠如した問題である。

こうした質問を発するまでにトリックに騙されないように用心することが肝心である。正しい対策はもっと当初の段階にまで舞い戻って、こうした教説の全てを綺麗サッパリと脱ぎ捨てることである。

第12講 事実 **Facts** とは何か。⁽¹²⁾

本日は事実 **facts** についてストローソンの抱く見解と私自身の見解を対照して、ストローソンの誤解が発生する有様を再現することを試みたい。本日もって今回の連続講義は終了となる予定である。

ストローソンによれば事物 **things** や人物 **persons** や出来事 **events** がこの世界に実際に実在する物事であるのとは異なって、事実 **facts** は存在性格を異にする別種の存在である。言い換えれば、意味されただけの存在に過ぎないという。またストローソンは「事実と符合する **Corresponds with facts**」という言葉は単なる熟語 **idiom** に過ぎないので、真剣に扱う必要はないとも言う。

こうしたストローソンの見解とは対照的に私の見るところでは事実 **facts** はこの世界に実在する物事であるし、意味の対応説 **Corresponding theory of Meaning** は十分に考慮する値打ちのある学説である。

私の見るところではストローソンの学説は間違っている。その間違いの原因は明白である。ストローソンは次に示す類いの誤謬推論に拠って自らの学説を

(12) 第12講はオースティンが実際に行った講義の復元ではない。ストローソン1964をもし仮にオースティンが読んでいたら行ったであろう仮想の講義を再現する試みである。

導き出しているのであるが、にも拘わらず、そのことに気づいていない。自分の間違いを自覚し反省することができずにいる訳である。

ストローソンの落ち入っている誤謬推論を例示して示そう。

まず出発点となる前提は次の二つである。

(1) He stated a fact.

(2) He stated that S.

この二つの前提から次の二つの命題をそれぞれ引き出すことができる。

(3) 「What he stated was a fact」

(4) 「What he stated was that S」

しかしながらこの二つの命題から次の第三の命題を引き出すことはできない。

(5) 「A fact is That S」 (or that T and &.)

何となれば「What he stated」の意味は(3)の命題と(4)の命題では同一ではない。それらの意味するところは異なっているからである。

(3) 「What he stated」 ≠ 「What he stated」 (4)

その字づらは同一であるもののその意味するところは異なっている。従って次のような結論に達する。

(6) A fact ≠ that S.

ところがストローソンは次のように言い張っている。「Facts are what statements (when true) state : they are not what statements are about」 p163。こうした見解に基づき、ストローソンは事実factsというものはこの世界に実在する物事ではなくて、実はこの世界には存在しない似せものでありまがいものの存在pseudo-entityに過ぎないことを力説しているわけである。

こうして見ればストローソンがこうした誤った推理である誤謬推論に導かれてその独自の見解に到達したことは明白であるし、そうした誤謬推論を介して到達した見解が間違いであることも明白である。

それではどうしてストローソンはこうした誤った推理に身を委ねてしまったのか。それは(3)の命題と(4)の命題に出現する「What he stated」の意味合いがどう異なっていて、その違いと関わりは一体どうなっているのか、とい

う意味論の難所を越えることが出来ずにそこでいわば躓いてしまったからである。

二種類の「what he stated」の意味合いの違いとその関わりは発話行為論 Speech Act theory に照らすと始めて十全に明らかとなる。(3) の命題に登場する「What he stated」とは言葉ではない=内部分 illocution のことである。これに対して (4) の命題に登場する「what he stated」とは言の葉そのもの locution のことである。発話行為 Speech Act を全体として捉えれば言の葉そのもの locution と言葉ではない=内部分 illocution とは一体であるが、こうした一体としての発話行為を二つの部分に抽象の作用を介して分析することができる。発話行為に伴いそれに備わる形で発される発音 utterance の部分が言の葉そのもの locution の部分であるし、発話行為の全体からこうした locution の部分を取りよけた残りの全身の行為の部分が illocution である。発話行為を構成する発言の部分とそこには含まれない残余である全身の行為の部分を抽象の作用を介して二つの別々の部分に分析して始めてこうした二つの部分の違いとその関わりが把握される。発話行為 Speech Acts を言葉行為 locutionary acts と言葉内行為 illocutionary acts の合成として理解する道が開かれることになる。

だがストローソンは発話行為が単なる発言だけの行為に止まるものではなくて全身の行為として実行される部分をも含む全身の行為の一樣態であることがついに理解できなかった模様である。その証拠にストローソンは私の講義のテキストを完全に誤解してその奇怪な学説を展開している。ストローソンの誤読が集中しているのはテキストの次の箇所である。

「The performance of an illocutionary act involves the securing uptake」 that is 「bringing about the understanding of the meaning and of the force of the locution」 (pp114~5. Lecture IX).

この箇所は「securing uptake」と「taking effect」と「inviting a response」という三局面のはじまりの局面を説明する箇所であって、まず発話行為を理解することを聞き手に求める局面を説明しているのであるが、ストローソンはこの局面において言葉内行為 illocutionary act が成立するというテキストの誤読に落

ち込んでしまった模様である。実際には言葉内の力 *illocutionary force* が成立する局面は二番目である「*taking effect* (効力の発生)」という局面であって、この局面では全身の行為からなる言葉内行為 *illocutionary acts* が実行され、それに伴ない言葉内の力 *illocutionary forces* が発生し効力が備わることとなるのであって、ここには誤解の余地などほとんどない。

ところがストローソンは「*understanding of … the force of locution*」という文章を採り立てて「*the force of locution*」言葉そのものの力により言葉内の力 *illocutionary forces* が成立するという風にこのテキストを読み損なってしまった訳である。問題の箇所は実際にはこういう文章である。

「*bringing about the understanding of the meaning (and of the force) of the locution*」(括弧は筆者が付加した)。

意味 *meaning* の中には意味内容 *sense* と指示対象 *reference* のほかに力 *force* も含まれているが、そのうち力 *force* を別に取り立てて意味の理論に厚みを加える。こうしたことを目指していることはおわりの通りであるが、上の箇所では言の葉 *locution* にも力 *force* が備わっているところがあることに注意を振り向けたまでのことである。その例としてはたとえば「*the force of a question*」といった言い回しに見られる「*force*」が挙げられる。許諾疑問文に見える語順の逆転や付加疑問文やあるいは明示的な遂行節の部分などは言の葉そのものの *locution* の一部分でありこうした形式では力 *force* が直接言の葉に基づいて発生することも無いわけではない。こうした言葉の事実になんとも触れたまでの話である。それに対して言葉内の力の殆どは言の葉そのものの *locution* ではなくて言葉では内部分 *illocution* によって成立するものであることは当然のことであるし、それが「*taking effect*」という二番目の局面で発生する *illocution* の効力であることも「*taking effect*」効力の発生という用語に照らせれば分かり切ったことである。

ところがストローソンはこの箇所を誤読して言の葉 *locution* によって言葉内の力 *illocutionary force* が成立すると理解した上で、言の葉 *locution* を発言 *utterance* に置き換えて「*illocutionary force of the utterance*」という風にあたか

も発言 utterance によって言葉内の力 illocutionary force が成立するかの誤読を重ね、私が全身の行為の理論として展開した発話行為の一般理論を、それとは異なる遂行的な発言の理論へと読み戻してしまう。「the force of the utterance」という発話行為の一般理論には全く含まれていない架空の事態を設定して自らの学説の出発点にそれを据えてしまったわけである。ストローソンのいう「the force of the utterance (発話の力)」というコンセプトには全身の行為の次元が完全に欠落しすっぱりと抜け落ちてしまっている。

ストローソンの誤読の焦点は全身の行為という次元を全く見損なっているところに集中している。事は明白である。こうして全身の行為に関する慣習はすっぱりとストローソンの視野から消え去ってしまうのである。あとは推して知るべし、である。

こうした視野の狭窄とでも言うべき事態が最も色濃く現れているのは、私こと J.L. オースティンの意見に反対してそれに反駁するためにストローソンが提出した三つの設例である。(ストローソン、444頁)

ストローソンの基本の見解はこうである。制度的ないし儀礼的に設定された慣習に依る場合は別として、発話の力の成立に寄与する慣習は — 言語に関する慣習を除けば — 存在しないとするものである。慣習ではなくて話し手と聞き手の意図の纏れ合い intentional complex が発話の力を産出する。これがストローソンの提出する対案であり、新説である。

慣習抜きで発話の力が成立する場合がありうることをストローソンはしきりに力説するが、ストローソンの掲げる事例のうち二つは空想的な設定であるし、他の一例は人間交際の次元を切り離した抽象的な作例である。

第一の設例はこうである。ストローソンは言う。スケートをする人に向かって「the ice over there is thin」と発言した場合に、全く警告という慣習がないところでもその発言が警告という発話の力を産出することが有り得ると。実際には英語で話しかけ相手に通じる地域には警告という慣習もあれば、語りかけという慣習もあることは明らかである。「Thank you for your warning / advice / suggestion / giving information / telling」。だからストローソンの設定は完全に空

想的である。空想の世界に於いて空想的な力が成立することを説いても、こうした空想的な設例は現実世界に於いては言葉の力は慣習に基づいて成立すると説く私の見解に対しては反論の力はほとんど無く、私の主張を打ち破る論拠にはならず、そうした証拠力を完全に欠いていることは明白である。

第二の設例はこうである。ストローソンは言う。「Don't go」と発言した場合に、慣習とは無縁に、その発言がrequest 依頼でもなく order 注文や命令でもなく、entreat 懇願であると記述される事態であることは十分に有り得ると。実際には発言がentreat 懇願に該当するかどうかの判定は、実在する慣習に照らして実行されるのが通例であるから、全く慣習抜きに行われた発言は精々entreat に似た行為と認定されることがありうるだけであって、entreat 懇願そのものとは認定されないものである。ストローソンがいう発話の力は空想的な力に過ぎないので、空想の世界の内部ではentreat 懇願と認定されると空想することは可能であるが、こうした空想的な物語をいくら並べても、現実の世界に於いては言葉内の力は慣習に基づいて成立すると説く私の見解に対する反論にはならない。空想的な事例には実在の事態に関する学説を覆すだけの証拠力が完璧に欠如しているからである。

第三の作例はこうである。ストローソンは言う。論者Xの主張や政策pに対して別の論者Yがobjection 反論qを述べる際には、何ら慣習なしに反論の力が発生することは明白であると。ストローソンの言う発話の力は空想の産物であるから、発言があると仮設すれば自動的に反論に伴う発話の力が成立することになる。

だが実際には論者Xと相手方Yとはお互いに相手になる人物を相互に確認し合いながら、Xの主張pとYの反論qとが食い違いのある見解であることを確認し合うといった決まった段取りに沿って議論を進めており、こうした議論と反論の慣習に従って反論という言葉内の力も成立することになる。従ってストローソンのいう発話の力が空想として別に成立したとしても、実際の議論が慣習に基づいて進められているという事実を何ら変更するものではない。慣習に基づいて言葉内の力が成立するという私なりの見解と慣習無しで発話の力

が成立するというストローソンの意見は現実世界の出来事とそれとは別の別世界の出来事をめぐる主張であるから、いわば立体交差の関係にあって、双方が成立してもどちらかが間違いになるという関係には立っていない。事態とそれを巡る二人の意見は完全に両立しうるのであり、それ故、相手方の意見を突き崩す証拠力が備わっているわけではない。

ストローソンが空想的な設例や抽象的な作例を並び立てても、私が実世界における実在について提出した意見を覆す証拠としての資格を発揮することにはならない。この点でストローソンが思い違いに転落していることは明白である。こうした奇怪な地点にストローソンを誘い込んだ原点は明白である。ストローソンは私ことJ.L. オースティンのtextsを誤読し、深々とした誤解に転落してしまったのであるが、自らの誤読に気づかず、自らの間違いを自覚できぬままに、間違った前提から正しい推論を展開して次々と間違った結論を導き出すという放れ業をやったのけたのである。⁽¹³⁾

〔補論〕王様の頭は禿げている。

バートランド・ラッセルは「On denoting (指示について)」⁽¹⁴⁾という論文の中で次の例文を挙げて分析を試みている。

「The present king of France is bald (今のフランスの王様の頭は禿げている)」

ラッセルの見解ではこの命題は偽である。ラッセルはこの命題を次のように分析する。

- (1) フランスには国王が一人は存在する。
- (2) フランスの国王は一人しかいない。
- (3) フランスの国王であって禿げていないものは誰もいない。

(13) P.F. Strawson, *Intention and Convention in Speech Acts*, *The philosophical Review*, vol 73, No4.

(14) 『現代哲学基本論文集Ⅰ』坂本百大編、勁草書房、1986年、59頁。

はじめに掲げた命題は (1) (2) (3) の命題の連言である。うち (1) は明らかに偽である。従って連言も偽となる。連言は要素である命題が一つでも偽であれば全体も偽となるからである。⁽¹⁵⁾

ラッセルの記述はもう少し厳密であり、次の様に再現される。⁽¹⁶⁾

(1*) 「x は現在のフランス国王である」は常に偽ということはない。

(2*) 「x も y も現在の国王であるとすれば、x と y とは同一である」は常に真である。

(3*) 「x が現在のフランス国王であれば、x は禿頭である」は常に真である。うち (1*) は偽であるから連言も偽となる。これがラッセルの説である。

J.L. オースティンはラッセルの説を批判したストローソンの学説をやんわりと批判している。オースティンの見解はこうである。まずオースティンはストローソンの学説を要約し、その上で更に批判を加えている。⁽¹⁷⁾

オースティンの見解はこうである。オースティンはまずストローソンの学説を要約している。その上で自らの見解をストローソンの学説との違いを際立たせる形で簡潔に提出している。オースティンの意見は次の順序で組み立てられ

(15) ストローソン「On referring (指示について)」(『現代哲学基本論文集Ⅱ』同前、1987。所収) 212 ~ 213 頁。及び飯野勝己訳 2019『言語と行為』講談社学術文庫、48 頁訳注*7 参照。

(16) 野家啓一 1993『言語行為の現象学』勁草書房、193 頁。

(17) 第十一講に「some say」とあるが、オースティンによるストローソン説の要約のことである。飯野は「一部の人は」(215 頁)と訳しているが、「声もある」くらいの意味の語句である。訳注の*5で飯野は「引用であるかのような体裁」(228 頁)というが、これは引用ではないし、引用のような体裁を取ってもいい。「someone asserts」というのは仮にストローソンの学説に当てはめてラッセルの挙げる例文を解析すればという意味の言い方であって、オースティン自身の見解を示すところである。

因みに飯野は 89 頁*14において「よくわからない」というが、「The cat is on the mat」も「The cat is not on the mat」もどちらも「The cat is below the mat」を「entail」しないと言っているのであるから、前提と帰結とがまるで正反対の論理的な振る舞いをするをオースティンは対照的に語っているだけのことである。

ている。まずストローソンの学説を要約する。ストローソンはまずラッセルの説を要約しているので、オースティンもその部分の要約をまず行っている。

まずラッセルの学説のストローソンによる要約の部分のオースティンによる要約をラッセルやストローソンの用いる例文とは異なる例文を用いて解説しよう。「フランス国王は鼻が高い」。⁽¹⁸⁾これが例文である。ラッセルはこう論じるとストローソンは論じる。この命題は次の三つの命題の連言である。

- (1) フランスには国王がいる。
- (2) フランス国王は一人だけいる。
- (3) フランス国王であって鼻が高くない人はいない。

連言のうち (1) は明らかに偽である。従って連言も偽である。ここまではストローソンによるラッセル説の要約の部分である。ストローソンはこうしたラッセルの学説に対して次の様に反論する。(1) は例文の一部分ではなくて例文を主張する際に必要となる例文の前提に過ぎない。この前提が偽である以上はそうした前提に基づく主張を行うことはない。前提が偽であれば例文が真であるか偽であるかという問題そのものがそもそも成立しない。

ここまでがストローソンの学説についてのオースティンによる要約である。この考えをラッセルが提出した「現在のフランス国王は頭が禿げている」という例文に当てはめるとどうなるか。こうなるとオースティンは考えていく。

まずラッセルの学説は次の様に要約される。例文は次の三つの命題の連言である。

- (1) 現在フランスには国王がいる。
- (2) フランスには国王は一人しかいない。
- (3) フランス国王であって頭が禿げていない人は誰もいない。

連言のうち (1) は明らかに偽であるから、連言も偽となる。

次はストローソンの学説の要約である。(1) は例文を主張する前提であるが、前提は明らかに偽である。従って例文が真であるか偽であるかという問題はは

(18) ストロークソンの用いる例文は「フランス国王は賢い」である。

なから発生しない。

ここまでがオースティンの行うストローソン説の要約である。

こうしたストローソンの学説に対してオースティンは前提が偽である発話の効力は適切性条件に照らして判断されると分析する。前提が真であるか偽であるかという問題は明らかに発生しているし、前提の真偽が発話の効力をどのように左右するのかという問題も発生している。要するに例文が適切に成立したのかどうかという審査は実際に行われるのであるし、審査は真偽の判定だけであるとするストローソンの意見が間違っていることは余りにも明白である。オースティンの答えはこうである。例文は「**null and void**（無効かつ空虚）」である。⁽¹⁹⁾

ラッセルの学説はどこが間違っているのか。ラッセルの誤りは引用符の解釈にある。ラッセルは外延と内包という論理用語が破綻していることを示す目的で次の二組の例文を挙げている。

太陽系の質量中心はある空間点であって、指示的な複合表現ではない。

「太陽系の質量中心」は指示的な複合表現であって、ある空間点ではない。

グレイの悲歌の一行目はある命題を述べていて指示的な複合表現ではない。

「グレイの悲歌の一行目」は指示的な複合表現であって命題を述べてはいない。

外延は物質であるか、命題であるか。あるいは人物であるか⁽²⁰⁾するが、内包は常に言葉である。それも命題には至らない断片的な指示句である。引用符はこうした言葉の断片を切り取る符号である。引用符は時に命題の全体を切り取るこ

(19) “How to …”137頁。

(20) 外延が人物である例文を次にあげておく。

ウェイヴァリーの著者はある人物であって、指示的な複合表現ではない。

「ウェイヴァリーの著者」は指示的な複合表現であって、ある人物ではない。

ともある。こうした内包の意味とは一体何なのか。ラッセルには説明の道具が備わっていない。何が足りないのか。ラッセルにはオースティンのいう言の葉 locution と言葉ではない (=内) 部分 illocution の区別がまったく欠けているのである。まず外延とは指示対象のことである。指示対象には物質ばかりではなく命題もあるし、人物もある。

太陽系の質量中心はある空間点であって人間の行為ではない。

「太陽系の質量中心」とは指示的な複合表現であって人間の行為（の一部）である。

グレイの悲歌の一行目は命題という人間の行為の一部であって単なる物質の状態ではない。

「グレイの悲歌の一行目」は指示的な複合表現という人間の行為の一部であって単なる物質の状態ではない。

グレイの悲歌の一行目とは「晩鐘が夕暮のときを知らせる」という命題である。言い換えればグレイが悲歌の一行目に書いた文章のことである。オースティンのいう locution のことである。これとは対照的に「グレイの悲歌の一行目」とは指示的な複合表現であって命題ではなくその構成要素にすぎない。言い換えればグレイが悲歌の一行目にある文章を書いたという事実のことである。オースティンのいう illocution である。引用符とは発話行為の一部を示す符号である。

発話行為には locution の部分と illocution の部分があってそのどちらを取り立てるときにも引用符を使うことができる。「晩鐘が夕暮のときを知らせる」という命題はグレイが書いた文章であり、グレイが行った発話行為のうち言の葉にあたる部分のことである。「グレイの悲歌の一行目」とはグレイがこの文章を書いたという事実のことであるから、その内包的な意味が「晩鐘が夕暮のときを知らせる」と同一になるのは極く当たり前のことである。指示句を用いた発話行為の全体が引用符のついた指示句の外延とされ言の葉の部分とその内包と

して取り出される。これが引用符の使用法である。

J.L. オースティンはジョン・ダンの「song (歌)」の一行目を引用することで、ラッセルの陥っていた混乱に終止符を打つことを企てたということができよう。“Go and catch a falling star!”という一文はジョン・ダンが書いた文章であり、ジョン・ダンが行った発話行為のうち言の葉にあたる部分のことである。

末尾に少々。次の推論は誤謬推論である。

(大前提) アホーの神は全知全能である。

(小前提) 全知全能の神は思い通りに奇跡を起こすことができる。

(結 論) アホーの神は思い通りに奇跡を起こすことができる。

なぜならばアホーの神は実在せず大前提が成立しないからである。

(2023年3月10日 畢)